坂本龍一

Sakamoto Ryuichi

Text / Eiichi Yoshimura　Photo / Ko Hosokawa

ぼくたちは、音楽家にとって困難な時代を生きているのかもしれない。

メディア・アートの時代に生きている

坂本龍一、62歳のこの音楽家は70年代に東京芸術大学でコンピューターを利用した作曲方法を研究し、やがてソロとして、あるいはYMOの一員として、つねにテクノロジーと格闘、あるいは寄り添ってきた。

プロの音楽家になってもテクノロジーから受ける刺激がつねにモチベーションになってきたという坂本龍一が、いま見つめるテクノロジーと音楽の関係。そして音楽を超えてアートとテクノロジーの融合をも見据えた現在の心境と活動について訊いた。

——最近は音楽に加えて、アート関連の活動も多いですね。

もともとはドイツ人アーティストのカールステン・ニコライと知りあったのが大きなきっかけかな。10年ぐらい前に彼と音楽のコラボレーションをやることになった。彼は一方では美術作家でもあるので、YCAM（山口情報芸術センター）で作品の展示をしたんです。それを観にぼくもYCAMを訪れるようになった。それから縁ができて、2012年にYCAM10周年記念として1年間にわたる音楽とアートというテーマでのキュレーションをやって、今年は札幌国際芸術祭。たしかにアートの仕事が続いています。10代のときから現代美術はとても好きでしたが、その道を目指したわけではないのに、ここにきてアート関係の仕事を頼まれることが多くなってきた。

——自伝では、芸大では音楽学部だったのにもかかわらず、美術学部に入り浸っていたとあります。

芸大に限らず、美術学部のほうがおもしろい人間がいるんですよ。あの頃はアートという概念もどんどん拡がって、当時はポップ・アートとかコンセプチュアル・アートといって、必ずしも絵がうまいことがいいアートに繋がるわけではないという時代に突入していました。いまも続いているその流れの中で、現代美術をやっている人がとくに絵がうまいわけではないし、逆に市井にいる絵のうまい人が必ずしも現代美術ですばらしい作品を作れるわけでもない。そこがおもしろい。

——坂本さん自身もメディア・アートのいくつかの作品を発表しています。

真鍋大度さんらもそうだと思うんですけど、いまはアートとテクノロジーと音楽を組み合わせたメディア・アートの時代だと思います。ぼくももともとコンピューターを使って音楽を作るということをYMOの頃からやってきたわけだし、テクノロジーやアートとは馴染みが深く、相性はいいんです。絵がうまいわけでも美術の才能があるわけでもないんですが…。

21世紀のテクノロジーと音楽家の悩ましい関係

——テクノロジーとヴィジュアルと音楽を結びつけたインスタレーションを作っている一方で、坂本さんの音楽はどんどんコンピューターを排除した生演奏や即興に比率が遷っているように見えます。

そうですね。いまでも音楽を制作するときには日常的にコンピューターを使っているのだけど、ライヴで演奏するときには使わなくなってきている。なんでだろう？　みんながステージでコンピューターを使うようになったからかな。Macを使って最新のプラグインを使っておもしろい音を出す若い人はいっぱいいるから、その真似はしたくない。せっかくピアノが弾けるんだから何百年も使われてきたピアノという楽器で、「こんなに新しい音が出せるんだ！」という発見をするほうが自分としてはおもしろいんです。

——オーケストラやピアノ・トリオでの活動も増えてますよね。

オーケストラとの共演も、古い楽器

古い楽器、編成の中からもまだまだ新しい音が出てくる。

であるピアノでいろんな音を出していることとちょっと似てるんです。まだまだ自分がいいと思う音色がオーケストラという編成の中から出てくるんじゃないかなあと思ってる。ピアノ、チェロ、ヴァイオリンのトリオでの演奏もずっとやってきていますけど、そこでもやはりトリオという編成で、自分の従来の曲がまた新しい姿に生まれ変わらないかなと思ってやっています。

——オーケストラやピアノ・トリオのためにこれまでの曲をアレンジし直してみて、あらためて自作について気づかれたことなどあります？

たとえばかつてテクノポップとして書いた曲であっても、オーケストラに編曲しやすい曲もたくさんあって、そうか、この曲はそうしやすいんだなという発見をすることがあるんです。たとえば「ハッピー・エンド」という曲などがそう。だいたい、イエロー・マジック・オーケストラなんていうバンドのために書いた曲だったんだから、そういうオーケストラ的要素がもともとあったんですね（笑）。もともとがシンフォニックなサウンドだった。

テクノロジーが変える現代の実演家の姿

——そしていま、坂本さんはひさしぶりのソロ・アルバムに取り組んでいるんですよね。

来年には出る予定。だけど、今年も6分の1以上が終わってしまったのに、まだ一音も書いてないです…（笑）。来年の春に出したとしても6年ぶりのリリースになってしまう。インターバルがどんどん拡がっていて、死ぬまでにあと何枚出せるかっていう。2枚ぐらいしか出せないんじゃないかって話ですよ、もう（笑）。パソコンとDTMの登場以前は、レコーディングするにしても他のミュージシャンと一緒に練習して、1時間なり1日なりをかけていいテイクが録れたら、それがゴールじゃないですか。個人でコンピューターでやりだすと、ここがゴールという地点がない。リミットレスなのでいくらでもやっていられる。むかし、まだアナログの時代に『音楽図鑑』（84）というアルバムを作って、そのときもリミットレスで、本当は制作費という意味でのリミットはあったはずなんだけど（笑）、それをぼく本人は知らずに1年10か月もスタジオを借りてレコーディングし続けた。同じ曲をほんのちょっと変えるだけで録音し直し。いまはそういう変更も、コンピューター上で数字をいじるだけで簡単に変わるから、自宅でいくらでも『音楽図鑑』的な状況を続けられる。どこかでやめるっていう決意がいまは大事なんです。

——コンピューターは人間の時間を奪いますよね。

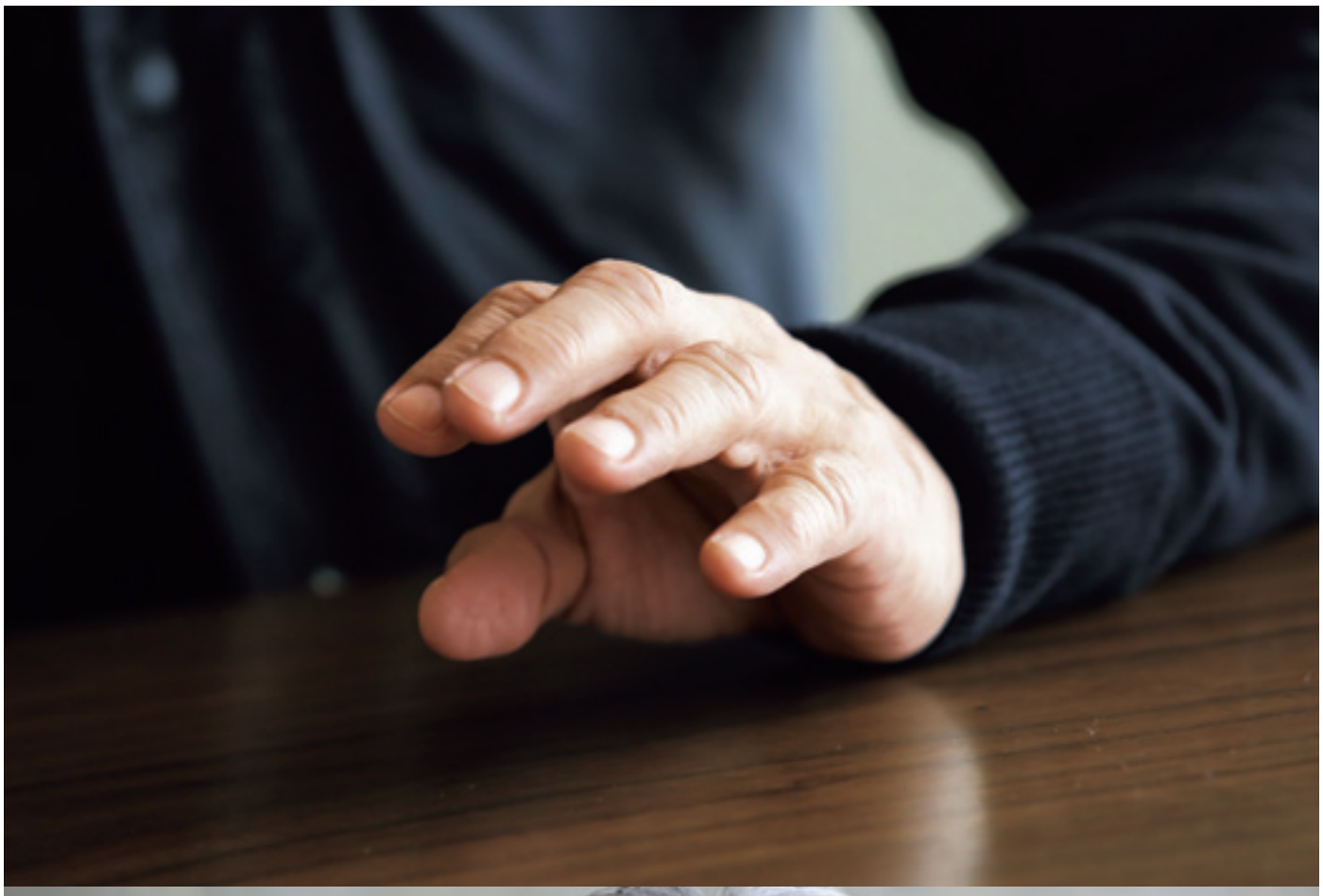
とくにSNS。あのおかげで読書量もものすごく減っちゃうし、困ったものです。たとえば本だったらどんなに分厚い本でも必ず最後がある。ツイッターにせよフェイスブックにせよ、終わりがないじゃないですか。リミットがないので、知識や情報をいつまででも探し続けちゃう。自分でリミットを設けないと、まったく際限がなくなる。

——テクノロジーの利点でもあり欠点でもありますね。

そういえば、最近、他人と一緒に演奏したことがないミュージシャンが意外と増えてるみたいなんですよ。

——え！

コンピューターを使えば全部一人でできちゃう時代でしょ。去年、ぼくが



たくさんの〝気〟に負けないように変身するための儀式

とても才能を買っている若いミュージシャンとセッションしてみたんだけど、なんだかうまくいかない。あれ、おかしいなあと思ったら、実は人と一緒に演奏するの初めてなんですって。え〜っ！ってもうびっくりしちゃって。いま世界中でCDが売れなくなってきて、音楽配信もそれをカヴァーできていない。それでみんなライヴを増やしてますよね。でも、ライヴができないアーティストだって最近は多い。難しい時代になってきました。

——坂本さん自身も近年はライヴをする回数が増えていますよね。ああいう大観衆の視線を浴びるステージに登る前、いわば私人から公人に変身するための儀式のようなものはあります？

香りかな。一時期は香りに凝っていて、最近もかつてほどじゃないけど、ステージに好きなお香を焚いておき、同じ香りの粉を自分にも振りかけてステージに向かいます。その匂いを嗅いで、気を落ち着けるんです。粉というのはお坊さんが法要とかに行った帰りに邪気を払うために振りかける粉。空港とかで説明に困るんですが(笑)。

——(笑)香りで変身するんですね。

やはり大勢の人の目にさらされるステージでは〝気〟をたくさん受けて、こちらもアドレナリンがものすごくたくさん出て、とてもハイになりますね。変身しないと受け止めきれない。逆にステージを降りてからその興奮を醒ますのも大変。若いときはそれを醒ますのに朝までお酒を飲んだりしたけど、最近は体力がないので(笑)、朝までは無理だけど、多少はお酒を飲んで醒まさないと翌日が持たない。それはもう何十年やっても変わりませんね。

PROFILE　音楽家。1978年アルバム『千のナイフ』でデビュー。1984年、自ら出演し音楽を担当した『戦場のメリークリスマス』で英国アカデミー賞他を、映画『ラストエンペラー』の音楽でアカデミー賞、グラミー賞他受賞。近年は音楽活動のほかYCAM（山口情報芸術センター）10周年展、札幌国際芸術祭2014などでキュレーションを手がけるなど現代美術にも深く関わる。主な著書に自伝『音楽は自由にする』（新潮社）など。

ロングインタビュー

坂本龍一